

名湖

21世紀への遺産

ストックホルム市のパーガース模型を作って見ていきながらモッセン校。小中学校がら、自然科学としての「水」になった二年・九年までの説明、さらに身近な環境としての湖の水質検査を行った。

ペルスン先生は、モデル作りは、分かりやすく生徒の関心を引く。下水処理場の三段階のろ過槽モデルにペンキ溶剤を入れたら、微生物が死んで生分解処理ができなくなった。水洗トイレにたくさん「捨てられているもの

地良い。生徒にとって夏水辺だ。ボート遊びをする身の「わーっ」と盛り上がった。「ユーモアも大切」とペルスン先生。説明も工夫する。水分子が話題になると、生徒が両腕を伸ばして体ごと分子構造の形になる。水を温めた時、冷やした時にどうなるか、体を動かして自分たちが使った水、どうなっていくのか。ま

環境教育

実践で分からせる

中学三年、「水」の授業。道水はどこから来るのか。かしてみる。「生徒が興味を持てるよう

6

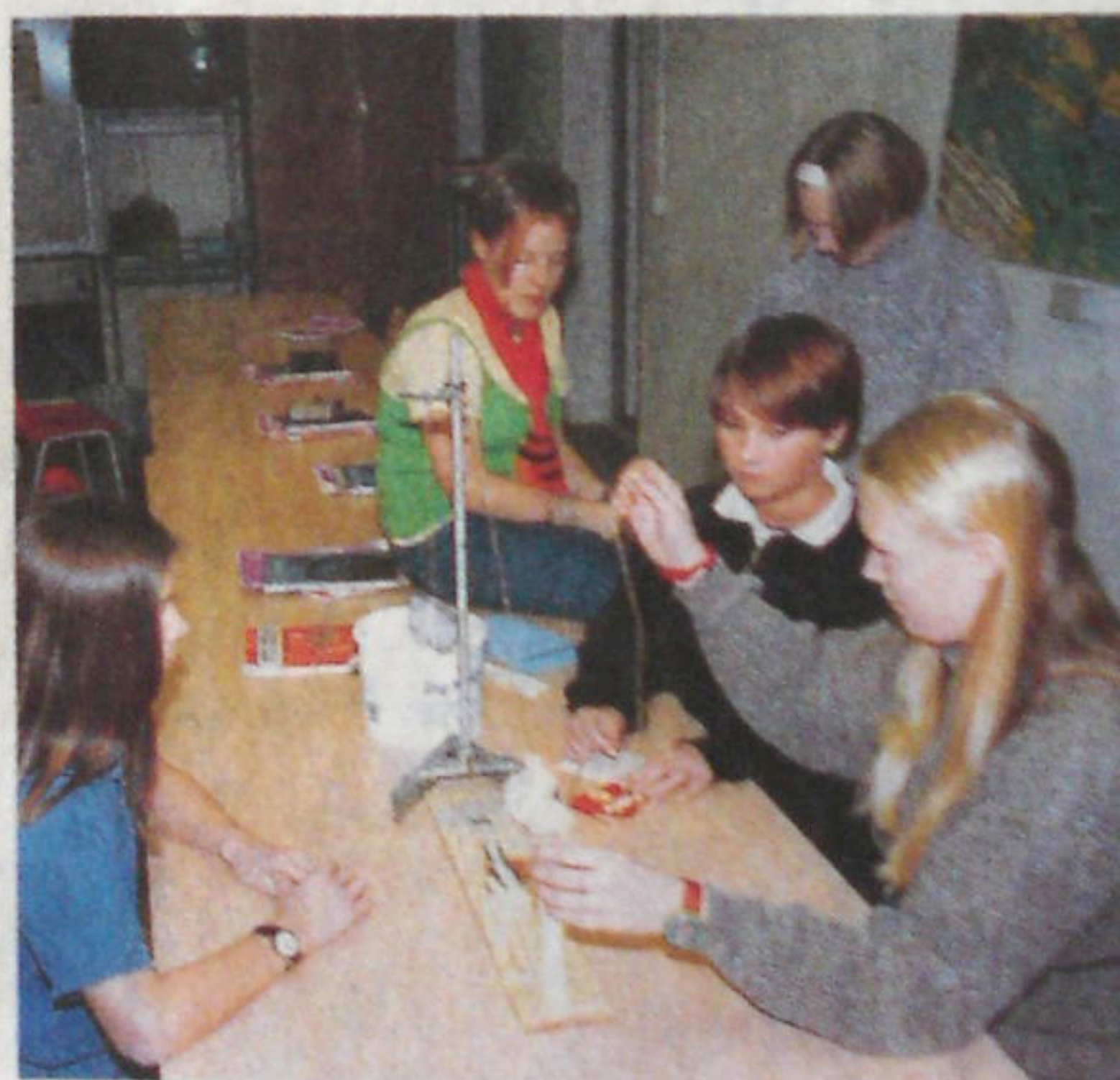
(題字は静岡県書道連盟 理事 福田 江極氏)

学校で価値観を育てる

と。もう一つ、勉強の結果を

例えば、生徒は湖水の水質検査をするに必ず、結果を地域の行政担当者に送っている。近所のゴルフ場が規模拡大してからは、もし水質結果に悪い影響が出れば自治体と政治家に手紙を書いて報告するという。「生きるための学習なのでから」

ペルスン先生はストックホルム市の環境教育指導員として、教員対象に講義も持っている。市の環境教育の実情について「そんなに一般的ではない。でも、興味を持つ先生はいるので望みはある。つい



「エネルギー」をテーマにモデル作り＝パーガー・モッセン校で

「学校生活から始まる」が多い。子どもが学んだを家に持っていくように人も生活態度を変える。意味が出てきました」(第一部終り) 報道員鈴木久美子が出しませ

この企画に関するご感想、提言などを郵便A Xでお寄せください。先は〒435 浜市東新町中目新聞東海社報道部名湖取材班 FAX (421) 52118



「学習が生きる力になるように」とペルスン先生は